



妹

か

菫

菫



妖光が染める闇

飛鷹 隼
Jun Hiyoh

T★NOVELS
Fantasia

Index

<i>part.0</i>04
<i>part.1</i>11
<i>part.2</i>21
<i>part.3</i>31
<i>part.4</i>41
<i>part.5</i>51

<i>part.6</i>65
<i>part.7</i>79
<i>part.8</i>89
<i>part.9</i>101
<i>part.10</i>109



part.0

高度七〇〇〇〇メートルの空は、僅かに群青から濃紺へと微妙なコントラストを見せて水平線がほんの少し、孤を描いていた。

雲は遙か下方、時速五六〇マイル以上の速さで川のように後方へと流れている。

（後ほんの少し、スロットルを開ける事が許されれば——）

頭上を覆う蒼の世界、その更に一段高い場所に、本来彼女が生きるべき世界がある筈だった。

だが、今日、そこへ行くことは許されていない。

彼女の乗る機体——ロッキード・マーチンF-202Cスターシューター戦闘機自体には彼女達をそこへと誘ってくれる能力はある。

ならば、彼女を成層圏と呼ばれるこの空に縛りつけているのは——

『オリエンタル・トップ、カグヤ・フライト。星の海が恋しい気持ちは解るがそれ以上は昇らんでくれ。今日のフライトプランは成層圏高度までの制限つきで提出されてるからな、申請なしの高度超過は後で始末書もんだぜ』

航空ヘルメットに内蔵された通信機のスピーカーから、僅かに苦笑いを伴った地上管制官からのコールが響いた。

「カグヤ・フライト、了解……ま、どっちにしる今日はこれ以上上昇するのは無理でしょ。機体のセッティングが自然吸気プロセスに固定されてるからこれ以上頑張っても酸化剤不足の燃焼不良でエンジンがストールするだけよ」

スピーカーから響く、管制官の声に僅かに眉を蹙めながら操縦桿を握る彼女——汎惑星間統合防衛機構宇宙軍少佐兼・太陽系連邦空軍少佐相当官、エミリー・シンクレアが吐き捨てるように言うと、再びスピーカーから「それもそうだ」と管制官の苦笑交じりの合いの手が返ってくる。

それがまた——エミリーの忌々しさを一層強めるのだが、それは無理矢理押し隠して代わりに別の事を管制官に訊ねる。

「それはそうとして、フリーフライト……模擬空戦の許可までノーとは言わないでしょうね。予め書類にして申請出して基地司令のハンコも貰ってる筈よ？」

『ああ、それは問題ない。太平洋上の演習空域の使用許可は下りてる。演習空域周辺に接近する航空機及びシヤトル

なし、ライフサポートの地上モニター問題なし、初めて乗った機体だ、無茶してぶっ壊さんでくれよ』

「解ってるわよ。三〇分程遊んだら帰るわ。カグヤ・リード、アウト」

そう言っつて、最後はかなり乱暴気味に通信を切ると、ちらりと視線を右方向に滑らせる。

五〇〇メートルほどの距離を置いて、群青の空に溶け込むようにして飛ぶもう一機の機影。

直線と見紛うような緩やかな曲線を描く、細く優雅なラインで纏められた機首から滑らかに続く、大型のデルタ翼を持つ胴体。

単座の戦闘機でありながら自力での大気圏突破／再突入能力を獲得する為に与えられた巨大な推力を誇る二基の可変サイクルエンジンを収めたナセルとその下に突き出た一対の垂直尾翼。

天才と言うよりも奇才と呼ぶ方が良いであろう、ロッキード社の伝説的な設計家、クラレンス・ケリー・ジョンソンの作品を髣髴とさせるようなシャープで、研ぎ澄まされた美しさを持つ機影だ。

それは同時に今、エミリーが操縦桿を握っているのと全く同じ機体でもある。

光学的なステルス要素を兼ね、大気圏外での飛行も想定している為に施された熱線反射用のメタリックグレイの塗装を纏った機影をほんの少しの間、うつとりと眺めたエミリーはその僚機の操縦席に収まった顔がこつちを見ているのに気付く、向こうもそろそろただ巡航するだけの飛行に飽きて来ているのだろうと思いつると、今度は自分から通信機のスイッチを入れて僚機へと呼び掛けた。

「操縦桿を握るのは教育過程以来の筈なのに、思ったより腕は落ちてないようじゃない、ティア」

『当たり前でしょ。私は頭の構造も普通の人とは違うのよ。いつぱん覚えたことはそうそう簡単に忘れたりしないわ』

言ってくれちゃって……
少し挑発的なエミリーの言葉に、殊更憤りを覚える訳でもなくさらりと返してきた声もまた——明らかに妙齢の女性のものだ。

「言ってくれるわね……ま、良いわ。時間は今から三〇分、最初は同位の相対戦から入って、撃墜判定を出したら墜と

した方が劣位スタートの追尾戦を時間まで。最終的に墜とされた回数が多い方が今夜の夕食、奢りね」

『オーケイ、この前浅草に良さそうな店見付けたのよ。

悪いわね、給料日前なのに』

負けん気の強そうな、だが、悪戯いたずらっぽい響きを伴った

声がスピーカーの向こうでほんの僅かにドップラー・シフトした。

それは、模擬空戦の開始に備えてこれまで寄り添うように編隊を組んでいた二番機——「ティア」と呼ばれた女性の乗る機体が急激な右ターンに入り距離を取り始めた証拠だった。

（多少無茶だとは思ったけど、あの娘を副隊長にして引っ張ってきたのは正解だったわね……まだ少し無理してるけど、でももう元のティアに戻ってる……）

二番機が右ターンに入ったのをリーダー表示と目視の両方で確認し、自らも乗機を左ターンに持ち込みながら、エミリーは今度には出さずに喉の奥だけでそう呟いた。

「そうはいうものの……」

急激な右旋回で身体に加わる横Gを、寧ろ心地よく感じながらも二番機の操縦桿を握る女性——クルエルティアは幾らかの疎ましさを感じずにはいらなかった。

無論、それは友人であり上官であるエミリーに対するものではない。

機動ユニットを背負って身一つで飛ぶ事に慣れていた彼女にとつて、密閉された戦闘機の操縦席に押し込まれて空間を肌で感じる事なく操縦桿とスロットルレバー、フットペダルを操って飛ぶと言う行為は余りにも間接的に過ぎてもどかしいものでしかなかったのだ。

とはいえ、現状では彼女本来の翼はまだ飛べる状態にはない。

それはこことは別の場所——エミリーやクルエルティア達、西方人類域からの「漂着者」エトランゼ達が仮の居場所と定めている海軍航空隊館山基地の格納庫の中で地球大気圏内での運用に合せた再調整と修理、改造を施されている真っ最中なのだ。

（偶然か、それとも最初から目的通りだったのかは解らな

いけど、地球近傍空間にワームホールが開口して私達がここに投げ出された以上、「奴ら」もまたここに来ると考えておかなきゃならない。無論、杞憂に終わればそれに越したことはないけど、樂觀に縋っている訳にはいかないのだから——)

遙か銀河系の反対側で、星の海で戦っていた頃を守るべきものを背負って戦う、などというのは漠然とした概念でしかなかった。

だけど、今は違う。

この星に流れ着いて初めて手に入れた安息。

共に流れ着いた仲間。

そして、知識ではなく実感として知った、家族と言う

存在——

それらを失わない為であれば、何でもしよう。それが

(私を、私らしく立ち直らせてくれたエミリーへの恩の返し方……)

人工実存体でありながら、並みの人間よりも人間らしい感受性を与えられたが故に味わう事になった苦痛。

あれから三ヶ月もの日々が過ぎて尚、未だ脳裏から消えぬ惨劇の光景。

彼女の戦友達を乗せたまま、地獄の劫火の中で焼け崩れ、砕け散った戦艦「スキピオ・エミリアヌス」の壮絶なる最期を為す術なく看取る事を強いられ、心に深い傷を負ったクルエルティアを、共に流れ着いたこの地で新たな部隊の副隊長に据えて引きずり回す事で、感傷に浸る暇を奪い取って立ち直らせた悪友のそれが思いである事を、今のクルエルティアは十分過ぎる程感じる事が出来た。

そして、ほんの少し腹立たしい事に、操縦桿を握って地球の空を飛ぶ、という行為——銀河系全域にその領域を広げた代償として、殆どの人類がこの母なる星をその目で見る事すらなく生涯を終える事が当り前となった今、王侯貴族の歓待にすら優ると言ってもよい至上の贅沢を、間違はなく楽しんでいる自分がいた。

(ならどうせなら、勝ってこの楽しみに華を添えてやろうじゃないの——)

狭い操縦席の中で唯一人になった事で、不意に湧いた感傷を持前の強気さで振り払うと、ぐっ、と操縦桿を握り直

して突撃機動に入ったエミリー機に一撃を加えるべく、クルエルティアもまた乗機を旋回から加速へと移行させたのだった。

どこまでも果てしなく広がる群青の空に、二筋の白い飛行機雲が幾何学模様を描いて交わった。



part.1

人類が本格的に星の海に漕ぎ出してから一三〇〇余年を經た時代——

殆どの者にとって、「海」と言う単語から連想されるのは煌めく数多の星々の輝きに満たされた宇宙空間の情景であろう。

それは、人であろうが人工実存体であろうが変わる事のない万古不変の法則である筈だった。

だから——

緩やかに波打つ、温かい地球の海に抱かれて頭上一面に広がる星の海を見上げるといふ行為が、どれ程彼女を魅了したものか、言葉にするのは難しいだろう。

と——

右腕に嵌めた腕時計型の小型端末からピーピーと言う電子音が響き始めた。

(あ、もうそんな時間か……)

それは、遙か宇宙からの漂着者達の新たな住処となつた海辺の街で、共に暮らす彼女と瓜二つの容貌を持った親友——周りの皆は、僅かな揶揄いと遙かに多くの親愛の情を込めて「クローン性双子」と呼び、自分達もたま

に実は本当の姉妹なのではないのかと思う事もあるが——の、帰宅を促す合図であつた。

夏の盛りとは言え、既に日は沈み、肩も露な薄手の白いサマードレス一枚では流石に太平洋から吹き抜ける潮風は少し、肌寒い。

座つていた防波堤から立ち上がり、尻に敷いていたハンカチを軽く払って埃を落とすと、緩やかにカーブを描いて漁港へ続く道路の向こうから、小さく揺らめきながらやって来る自転車の燈火が見えた。

「まったく……暇があるとすぐここで何時までも空を見るんだから……よく飽きないね、リカ」

「あはは……ごめん、理香ちゃん。でも……」

「リカ」と呼ばれた防波堤に座つて星を眺めていた少女——エグゼリカは、ほんの少し恐縮そうな表情を浮かべつつも、そう言つて再び視線を遥か頭上に転じた。

釣られて、迎えに来たエグゼリカそっくりな容貌の少女——上田理香も空を見上げる。

「うん、言いたい事は解るよ……あの星空の向こうに、私達が元いた世界があつて、いつか私達はあそこへ帰らなき

やならない……」

「けど、宇宙にいた時は、宇宙があんなに遠くて、高く
て広い世界だったなんて全然思わなくて……不思議だよ
ね」

その言葉に、理香が同意の首肯きを返そうとした刹那、
海から吹いてきた少し強めの風がほんの僅か二人の体温
を奪い、そのついでに髪の毛を——二人のごく僅かな識
別点の一つ。エグゼリカのアツシユブロンドに対して理
香は少し赤みがかつた栗色。もう一つは瞳の色でエグゼ
リカは深いコバルトブルー、理香は少し緑がかつた黒——
揺らして抜けていく。

意地悪な風に少し身震いした二人は、それでふと我に
返り互いに苦笑を交わす。

（いつか——それは多分、そう遠くない日の事……そし
て、それはこの生活が終わりを告げる日でもあると言う
事……）

家では誰もが、意識的にその事を話すのを避けていた
が、その実誰もがそれを既定の未来として承知していた。
だからその日まで、後悔しないように今を精一杯生きて

いたい。それが、二人にとって——いや、共にこの星に辿
り着いた六人にとって最も大切な事であった。

「せーのっ！」

威勢のいい掛け声と共に、だがその声とは裏腹にへろへ
ろ、という感じで放り投げられた鉄球は幾らも空中に留ま
る事なく、ぼとりと地面に落ちて一度ほんの小さく弾むと、
すぐその場に停止した。

「二メートル八センチ……私の勝ちねっ」

「むーっ、別に距離を競ってる訳じゃないもん。真っ直ぐ
正確に放る練習だもん」

「それも私の勝ちねっ。私の投擲は中心線から右に一度、
リカの投擲は左に六度のズレだし」

「ぶーっ！」

チルダ宇宙艦隊の漂着者六人の身元を引受けている、当
局の指示によってエグゼリカと理香の二人は年齢相応の生
活——つまり、一六歳の少女に相応ふさわしい生活を送る為に地
元の高校に編入されていた。

この極東アジア準州日本では遙か昔からの伝統として、

つまり、二人が編入されたのは新学期の始まりと同時に同時期であった為、最初は戸惑いがちだった学校生活というものに二人が順応するまで、そう長い時間を必要とはしなかった。

そして、一学期の終了の為に避けて通れない儀式——期末考査をまあまあそれなりの成績で乗り切り、終業式を間近に迎えたこの日の放課後、二人の姿は何故かグラウンドの片隅にある陸上部の練習場にあった。

前日突然にエミリーとクルエルティアから、ハンマー投げの練習をするよう申し渡され（正確には、申し渡されたのはエグゼリカ一人であって、理香は別に指示された訳ではないのだが）、訳が解らないままに陸上部の顧問に頼み込んで練習場の一つを借り出したのである。

幸いにも、陸上部は夏の大会前の練習試合で今日は不在だったし、二人の編入前に学校側に対しても当局から事情の説明が入念に行われており、軍務との兼ね合いでの要求には出来るだけ便宜を謀るよう要望が出されていた事もあって割とあっさり許可を取り付ける事は出来た。

とは言うものの、これまでこうした投擲競技の練習などした事もない二人である。

付き添ってくれた体育の教諭に基本を教えて貰って一時間程やってみたものの、その程度ではなんとか投擲サークルを囲む安全ネットに鉄球を引っかけずに飛ばせるようになるまでが精々だった。

「……………取り敢えず、姉さんから指示されたからやってみようけど、これって一体何の役に立つんだらうね」

「さあ」

なんとなく、いろいろと納得出来ぬものを覚えながらあからさまに目の前の現実から目を背けるようにエグゼリカがそう言うと、くるくる、とメジャーを巻き取りながら理香は器用に肩を竦めた。

「……………解んないのはあんたらの方よ」

「わっ！」

不意に、横合いから第三者の声。

驚いたエグゼリカが声のした方を振り向くと、そこには心底呆れ顔でこちらを見ている少女の姿があった。

「ホームルームが終わったと思ったら二人してあつという

間にどっか行っちゃうから何かと思つたら、こんなところで何やってんだか……」

「あははは……」

これ見よがしに左手で前髪を抱え上げて溜め息を吐いて見せたのは、この学校に編入されて以来もつとも仲のいい友人となっていた瑞樹さとみと言う名のクラスメイトである。

「あー、別に遊んでる訳じゃないんだけどね。昨日姉さんに言われて……まあ、仕事の絡みって事くらいは解るけどそれ以外はぜんぜん私も理由は解らないし」

あからさまな呆れ顔に、つい苦笑しながらそう言うエグゼリカの様子に、再びさとみは遠慮なしの大きな溜め息を吐いた。

「まあいいわよ……に、してもリカ、あんたホントにレプリカントなの？あんたって並の人間より非力だしドジだし……あたしや、あんたを見る度に人工実存体に関する認識が根底から崩れそうで頭が痛いよ」

「あはは……まあ、私や姉さん——というより、トリガーハート計画で生まれたRPっていうのは基本的に無人

随伴艦の司令ユニットだから。確かに、普通の人よりは真空曝露や耐熱・耐寒、高G特性は高いけどアンドロイドやサイボーグとは違うし」

「ふん……の、割にはたかだか二八度ぐらいの気温でバテるように見えるのは気のせいかしら？」

エグゼリカの説明に、納得したやら腑に落ちぬやら解らぬ表情を浮かべたさとみだったが、最後につけ加えた一言はなかなか効果的な一撃となってエグゼリカの胸にぐさりと突き刺さった。

「あはは……リカに限らないわよ。私達宇宙生まれの植民星系育ちは大抵コントロールされた気象環境の中で育つてからね、気象コントロールなしの本物の夏つてのは生まれて初めての経験だし」

情け無さそうに頭を抱えたエグゼリカの姿に流石に憐れさを感じたのか、理香が咄嗟にフオローを入れた。

実際のところ、地球の積載人口が限界を越えた二一世紀後半に比べると、現在の地球人口はその五分の一程度の約二十億人にまで減っており、更にその当時深刻な社会問題となっていた地球温暖化の主要因となっていた温室効果ガ

ス（主に大量の水蒸気と二酸化炭素）の排出が激減したこともあって、この一〇〇〇年余りの間に平均気温は約一〇度近く下がっていた。

西暦二〇五〇年代初頭には七月下旬の平均気温が四〇度を越えていたこの日本でも、現在は最も夏の盛りとなる八月中旬で精々三二度程度と、過ごしやすさの桁は格段に違っている。

とはいえ、理香の言う通り人為的に環境改造を施された多くの植民星系や宇宙群島、浮遊都市群では一年を通して平均気温が二〇〜二五度、夏と冬の温度差がプラスマイナス三度、湿度も五〇〜六〇パーセントの間になるよう気象コントロールが行われているのが一般的だ。

その為、涼しくはなっていると一言え夏の盛りで三〇度を越え真冬には氷点下に落ち込む、寒暖差の激しい気温や地方や季節によつては優に一〇〇パーセントを越える強烈な湿度と降雨に理香達のみならず多くの宇宙育ちが地球での生活を始めると何よりまず、それに辟易させられるのである。

無論の事、連邦政府当局がその気になれば地球にも気

象コントロールを施すことは容易い。

実際、太陽系内の他の居住惑星——金星、火星、木星ガリレオ衛星群では高度な気象コントロールが実施され一年を通じて温暖で過ごし易い環境が提供されている。

にも拘らず、地球だけが自然の気象環境のまま置かれていたのは、銀河のサファイアと形容されるこの母なる奇蹟の星に対する畏怖と敬意、そしてなによりこの星こそが現在の星間文明のルーツとなった人類文明の発祥の地であるという全ての人類の共通認識があるが為と云ってもいい。

現在の地球は人類文明の原型を保存する目的のため、一切の近代開発が禁止され都市の景観も条例によつて二〇世紀後半から二一世紀初頭のそれを模して形作るよう定められている程であるのだ。

まあ、実際の社会生活においては超光速通信網への接続や環境への悪影響を最低限度に抑え込んだ完全循環性有機素材・マイクロマシン、非環境依存系エネルギーの使用など、現代における「常識」まで排除されている訳でもないのではあるが。

そして、そうした事もあって現在の地球の産業は主に農

業・水産業・林業と言った第一次産業に特化しており、太陽系連邦の政府及び軍中枢は金星のヴィーナス・クリーク特別行政市に、経済・金融中枢は火星の東キヤナル市に、それぞれ置かれている。

尚、クローニングや遺伝子組替え、急速成長技術を用いずに作られる地球産の農作物や畜・水産物、天然材料はありとあらゆる人類世界における最高級品となっている事は言うまでもない。

とまれ、そんな事情もあって、この日の日中気温二八度、湿度八一パーセントと言う環境は、無論地球生まれ地球育ちのさとみにとつても少々不快ではあったがそれ以上に宇宙育ちのエグゼリカや理香には辛いものがあつたのは事実だ。

「……ま、いいわよ。どうせ地球育ちって言っても、北の出身だと二五度くらいで暑い暑い言う子もいるし、南の出身者だと二〇度割った位で寒い寒い言うし……それより、今日は基地には行かないんでしょ？そろそろ切り上げてお茶しに行こうよ。異星人^{エイリアン}の侵略に備えるのもいいけど、今くらいは普通に高校生ライフをエンジョイし

ても罰^{ばち}当たらないわ」

さとみのその言葉に、如何したものか一瞬エグゼリカは思案に暮れたが、結局はまあ、そう言うものかもしれないと思うことにした。どうやら、理香も考えは同じだったようで二人して互いに小さく首肯きあうと、「じゃ、そうするか」と答え、後片づけの為に腰を上げたのだった。

エグゼリカが命じられた謎の特訓の正体が明らかになつたのは、終業式の翌日夏休みの最初の日の事であった。

折角の夏休みではあったが、朝寝を楽しむ贅^{ぜい}沢を許される筈もなく早朝から叩き起こされたエグゼリカ達は、エミリーに言われるままに連絡機に乗り込まされ、昼前には太平洋のど真ん中、グアム島の海兵隊^{S.F.M.C.}基地に降り立っていた。

「ふあ……あ、で、こんな所で一体何が始まるんですか？」
連絡機から降り、司令部ビルへ案内されたものそれから三〇分、未だなんにも始まる様子がない事を怪訝^{けげん}に思いエグゼリカが聞くと、同様に一体なんでこんなとこまで朝っぱらから来る事になったのかまったく理解出来ない他の三人——理香とメリッサ・リー中尉、アリサ・マイヤ

一少尉も同感だと首肯した。

四人の疑問含みの詰問気味の視線を投げ掛けられたエミリーとクルエルティアは暫し顔を見合わせ、「どうする？」「どうしよう」とひそひそ話を交わしていたが、結局は「まあ、口でどう言うより実際に目で見る方が手っ取り早いでしょ」と黙秘の姿勢を貫きとおし、盛大に上がるブーイングをBGMにして悠然とコーヒートを啜ったのであった。

それでも、(年頃の女性には少々へヴィに過ぎる)昼食を挟んで午後一時前には司令部付きの従兵が彼女達を呼びに来て、六人は演習場の一角に設えられた見学ブースへと席を移した。

この日実施される演習のメニューは典型的な揚陸戦だった。

まず、超音速巡航ミサイルと進攻爆撃機による対抗部隊の早期警戒網と防空網への徹底した破壊が実施され、それに続いて海中揚陸艦から出撃した海兵隊装甲歩兵が海岸線への強襲上陸をかけ橋頭堡を確保、陸戦部隊を陸揚げした後、戦闘車両を前面に立てての掃討戦に移ると

言う段取りである。

尤も、見学ブースで見守る六人のうち、流石に黒幕であるエミリーやクルエルティア、電子戦管制官であるが故に職責上の興味が優ったアリサを除く三人に取って、序盤のそれはかなり退屈なものであったのも事実だった。

確かに、大気圏内最高速度マッハ一二を誇る巨大極超音速進攻爆撃機、ボーイングB-8E「ソニック・フォートレス」が僅か三〇フィート程の高度を維持して突っ込んでくる様はそれなりに彼女達の度肝を抜きはしたものの、素人相手に見せる展示訓練ならいざ知らず、大気圏内戦闘の経験は殆どないとは言え何度も実戦の場を潜ってきた軍人相手に見せるものとしては興がないのも甚だしい———なんでこんな演習の形を取ったシヨウを見なければならぬのかと、三人を代表する形でメリッサが口を開き掛けた時、漸くエミリーとクルエルティアが見せようとしたものの正体が明らかにになった。

巡航ミサイルと進攻爆撃機による徹底した空爆———を想定した評定が行われ、演習場のいたる所に目標の完全破壊を示す赤いレーザポインタのマーキングが付けられ、そ

れだけでも早、對抗勢力の戦力は一掃されたかと思える程だったが、それでも破壊を免れた「事になっている」
 防御陣地や戦闘車両があちこちに姿を表し始める。

それに対して、全身を完全に装甲戦闘服で覆っている
 為遠目にはアンドロイド、若しくはサイボーグ兵のよう
 にもみえる海兵隊の装甲歩兵も携帯ミサイルや対装甲ラ
 イフルで応戦しながら前進を図る。

基地司令や演習統制官も周囲に陣取っている手前、苦
 勞して欠伸を噛み殺しながら極力真面目に演習を視察し
 ているように見えるよう表情を作っていたメリッサだっ
 たが、流石にいい加減それも我慢の限界に達してせめて
 耳元で苦情の一つも言ってみようと思つてやろうとエミリーの方に顔を
 向けかけた、その時だった。

「皆、あれ見て！」

不意に、メリッサの頭上で声が響く。

驚いたメリッサがまずその声の主——エグゼリカの顔
 を見つめ、ついでエグゼリカが指差す方向に視線を向け
 た時、眼前では何とも言いがたい奇妙な光景が発生して
 いた。

それは、對抗部隊の反撃によって数名の装甲歩兵が死亡
 宣告を受けた直後に起こっていた。

戦死者の発生によって陣形に穴が空き、それによって海
 兵隊側の火力密度が低下したと思つた矢先、数名の装甲歩
 兵がやおら左腕を前方に突き出して、ミサイルとも擲弾と
 も異なる「何か」を敵車両群の両翼にいた軽量装甲戦闘車
 にぶち込んだのだ。

直後、その「何か」を撃ち込まれた装甲車が突然、あり
 得ない角度で陣形の外側に向けて吹っ飛んで地面に落下し、
 盛大な音を立てて転がったかと思つたと直後には元来た方向
 へ横っ飛びに吹っ飛び、典型的な突撃陣形である楔型陣を
 作っていた戦車に激突した。

通常、戦闘重量一〇トン程度に過ぎない装甲車が追突し
 た所で、戦闘重量三〇トンを誇る主力戦車が深刻な破壊を
 被る事はないのだが、遠心力という形で通常の走行速度を
 遙かに越えるスピードと運動エネルギーを与えられてぶつ
 かってきた装甲車——と言うよりその残骸の直撃を砲塔に
 モロに食らったその戦車はあっさりと主砲の一五五ミリ電
 子熱砲の砲身を吹き飛ばされ、分子傾斜素材の一体整形で

作られて全方位に対して強靱な防御力を誇る筈の無人砲塔を、しゃんこに押し潰され、そのまま激突した装甲車の残骸と一つになって纏れ合ったまま横転して息の根を止められた。

それで漸く、動きを止た残骸から伸びる一本のケーブル——単分子結晶炭素繊維で作られた強靱そのもののワイヤーロープの存在が全員の目に止まり、装甲歩兵が撃ち込んだのが本来は工兵隊や空間作業員が重量物の牽引に用いたりレンジャー隊員が高所登坂・懸垂降下の際に用いる特殊なアンカーであつた事に気付く。

「姉さん、アレって……」

「ふふ、そうよ。私も気付いたのは偶々だったんだけどね、偶然見てた海兵隊の演習ビデオでアンカーユニットを接近戦の武器に用いてるのに気付いて、これは使えると思つたのよ」

驚愕の表情を顔面に張りつかせたまま目を白黒させているエグゼリカ——と言うよりも、エミリーと自分を除く全員の様子に、してやったりと取っておきの悪戯を成功させた悪童のような笑みを浮かべながらクルエルティ

アがいうと、エミリーも表情に会心の笑みを浮かべていた。それはどう見ても一部隊を預かる司令官と副司令官というよりも根性の悪い悪ガキそのものの表情だったが、驚きが全てを支配している四人にはそれに付いて憤りを覚える余裕もなかった。

演習は海兵隊装甲歩兵の思わぬ反撃によつて陣形を完全に崩された対抗部隊に対し、確保された橋頭堡から揚陸された進攻部隊戦車部隊が苛烈な攻撃を加えての一方的な掃討戦に移っていたが最早彼女達の興味はそこにはなかった。